

## 日本とロシアの諺に於ける数字の考察

カチャエワ ラダ

歴史に名の残る人が生みだした金言や格言とはちがい、諺はあくまでも名もない庶民の生活の中から生まれた産物だ。語りつがれ、言いつがれて来た諺の中にきらめくのは民衆の生活の知恵である。そこには長いあいだの体験を通して得られたさまざまな知識の集積があり、それを後世代の人々に伝えようとする。さらに注目すべきことは諺に見られる人生・人間についての批評や哲学は大多数の人たちの共感を通して初めて言い伝えられて来たのであると言う事実である。この点から日本の諺はまさしく日本人による、日本人のための日本学の集大成と言う事ができる。少なくとも日本人の性格の典型が、そこには浮き彫りにされていることはまちがいない。

全世界において諺のない所はないが、それらの諺を比較して見ると、文化、言語、表現技法の地域差などがよくわかる。たとえば日本の「船頭多くして船山に登る」にあたる諺はイギリスでは「料理人が多すぎるとスープができそこなう」、ロシアでは「子守が七人いると子供は盲」、イランでは「産婆が二人いると赤ん坊の頭が曲がる」となる。このように相互に離れている国々において同工異曲の諺が見出される事は人間の発想、生活の知恵が、普通に考えられている以上に共通性と普遍性をもっていつることを示している。

ロシア語の諺はきわめて多い。19世紀の言語学者・民俗学者として有名なダーリが民衆の間で現使われているものだけを探して編纂した「ロシア民衆の諺」には、実は三万の諺が集められている。諺は作られるものではなく、ダーリも言うように「叫びや呻きのように」おのずと生まれる物である。それゆえにこそおたがいに多くの矛盾をはらみながらも、全体として「民衆の知恵の総集成」と言えるのであろう。

ここで諺に現れる数字の問題に触れたいと思う。

ロシア語：Sem' raz otmer' odin otrezh'.

日本語：裁断する前に七度はかれ。念には念を入れよ。

と言う諺はロシア語にも日本語にもある。しかしどうして七回か、どういうわけがこの数字が選ばれたのだろうか。昔を振り返ってみても七と言う数字が度量衡の単位として人間が使ったことは決してなかった。ロシア民族はダース、つまり12と言う単位を用いていた。細かいものは40を単位にして数えられていた。それによって80年前と言うのは2かける40年前と言われていた。一着分として必要なクロテンの毛皮40枚より成る一山とも言われた。民衆が用いる謎によると、人間は40週間にわたって牢屋閉じ込められている。その意味する所は母の胎内のことであるが、そこから40週間後誰でもこの世に出てくると言う事はすべて隠しているものは後で明るみにさらけ出される事を意味する。

(2)

40日後お産したばかりの女は罪を浄めるための祈りを捧げる。そして40日後は死者の冥福を祈る。ロシア民話では英雄は目的地まで40日間疲れを知らずに行く。宮殿には40の扉がある。このように40と言う数字は活発に使われている。

しかし7も民衆の言葉では少なからず用いられている。この数字がなぜ用いられるのか今の所よくわかっていない。7を単位にしての計算は民衆の物ではなく、外国から持ち来たらされたものと考えられる。7の利用が伝わった原因の一つにはキリスト教の普及があったと思われる。キリスト教化はロシアに7つのサクラメント、7つの聖体聖餐、7つの大罪、7人の賢者等の観念を持ち来たらし、また週の7日目は神に捧げるべきことを命じた。その結果現れたのは：

例1 U semi nyanek ditya bez glazu.

一人の子供には七人もの乳母がつくと子供の世話がおろそかになる。  
(船頭多くして船山に登る。)

例2 Za sem' wyorst kiselya khlebat'.

重湯を飲むために7露里も遠くへ行く、つまり用もないのに遠くに出かけると言う意味である。

例3 Kniga za sem'yu pechatyami.

7つ封印がある書物、つまり何の事かさっぱり分からぬと言う意味である。

例4 Sem' potow soshlo.

7つも汗をかく、つまり精出して働くと言う意味である。

例5 U semi pastukhow ne stado.

7人も牧童がいると群はばらばらになる。  
(船頭多くして船山に登る。)

ロシアでは「semi k」と言う復活大祭(イースター)、第7週目の木曜日に死者の霊を祭ると共に春を迎える民間祝日がある。そのように7と言う数字は民衆の生きた言葉に非常に愛好されるようになった。例えば血のつながりが薄い親類は「sed' maya woda na kiselye」と言う。その上、「7人は1人を待ため」と言う民衆の規則が出現した。経験がある人に関しては「7つの竈で焼いたパンを食べた」と言う言い方がある。「強い人は7人と戦わねばならぬ」、(つまり男は敷居を跨げば七人の敵がある)と言う言い方もある。このように7を使う例をあげればきりがなほど多数ある。

ロシア語の諺と慣用的言い回しの中にある数字を調べてみたが、7が一番多かった。  
[下の表参照]。

ロシアの諺及び慣用的言い回しの中における数字出現頻度 [合計516]

数字	7	3	100	1	2	10	90	40
頻度	16	4	3	2	2	2	1	1

表で見られる通り7が一番人気のある数字である。しかし日本の諺ではどんな数字が愛好されるであろうか。私は「諺の読本」と言う本を選び、この中にある1145の諺を検討し所次のような結果が得られた。日本語では数字を使う諺は11.5%を占める。それに対してロシア語では6%しかない。日本の諺における数字出現頻度の表を参照されたい。

日本の諺における数字出現頻度表 [合計1145]

数字	3	1	100	7	2	10	1000	5	8	80	6	50	10000	17	18	99
頻度	32	21	15	12	12	7	7	5	5	3	3	2	2	2	1	1

この表でまず目立つことは大きな数字が比較的好まれ、誇張的表現の傾向が見られることである。「後の千金より今の百文」、「彼を知り己を知れば百戦危うからず」、「風は万病の元」、「酒は百薬の長」、「百聞は一見に如かず」。それは日本では百、千、万が度量衡の単位として人間が昔から使っているためではないかと考えられる。しかし一番使われる数字は3であった。もう少し詳しく見ましょう。「子は三界の首枷」。親が子を思う心にひかれて、その自由や行動を一生束縛されることを言う。「三界」は仏教で過去、現在、未来の三界、あるいは欲界、色界、無色界、すなわち全世界の意。「益者三友損者三友」と言う表現がある。交際して益を得る三種の友と、損を受ける三種の友。前者は直言、誠実、博学の友であり、後者は、不誠実、巧言の友である。意味は異なるが、類似の表現に「益者三業、損者三業」がある。利益を得る楽しみ三つと、損失を受ける楽しみ三つがあるという意味で、出典は上と同じく、「論語・季氏」。

「読書三到」．「三到」とは、心到（＝心を散らさず読む）・眼到（＝目をそらさず読む）・口到（＝声に出して読む）と言う、読書をする上での三つの法のこと．

「金は三欠くに留まる」と言う．「三欠く」とは、義理・人情・交際の三つを欠くこと．人としてなすべきことをせず、恥や義理を欠くほどでなければ金はたまらないと言う意．

「女は三界に家無し」と言う諺がある．女は、この広い世界で、どこにでも安住できる所がない．幼少の時は親に従い、嫁しては夫に従い、老いでは子に従わなければならないとされるのもこの意に解されよう．「三界」は仏教で欲界、色界、無色界、すなわち全世界の意．

三と言う数字が活発に使われている理由は仏教の影響であるのではないかと考えられる．三と共に七と五がかなり多く現れている．「親の光は七光」、「七転び八起き」、「一寸の虫にも五分の魂」などが例にあげられよう．「七宝の山に登って手を空しゅうす」と言う．さらに「女に七法あり（＝女には一方的に離縁されても仕方がない七つの場合がある）」などと言われる．「七法」は父母に不服従、不妊、多言、窃盗、淫乱、嫉妬、不治の病．「女に五障三従あり」の「五障」は、女性が持っている五種の障害、すなわち、梵天、帝釈、魔王、転輪聖王、仏の五つになれないとするもの）．「七宝」は仏法で言う七種の宝．「七宝の山」はすぐれた師の門を言う．と言う事は日本の諺もロシアの諺も宗教の影響を与えられていたのである．

その外には諺が実際生活の各方面の知識があつかわれている．例えば、「口も八挺」と言う．「八挺」と言うのがどう言う意なのか．昔、「小早」として足の早い小舟の制があった．舟は櫓がなく、多くは半垣作りか欄干作りであったが、これに多くのろをつけて、物見・使番・先手の戦船など、敏速を第一の目的としたたものである．ろの数によって二挺立から四十挺立まで二十種あったが、このうち八挺立、すなわち八挺小早が一番手頃であったらしく、自由自在に活動のできるものとして重宝がられたようである．この「八挺」が、自由自在に活動のできる能力を指す語となって、「口も八挺手も八挺」に入っているのではないかと思われる．

しかし時々特別の意味がなくても数字が用いられることがある．例えば「人の噂も七十五日」、「七十五日」と言うのにはなにも必然的な意味はないが、「初物食へば七十五日の齢が延びる」・「七十五日は金の手洗ひ」と言うように、かなりの日数の意としてよく用いられている．

以上、日本とロシアの諺に於ける数字の使用の仕方を比較・対照し、考察した．結論として述べ得ることは、ロシアの諺に比し日本の諺には数字が比較的多く使用されること、ロシアの古い生活習慣は現在使用されている諺や慣用的言い回しに足跡を残していること（例えば12と40がよく用いられているのは古い度量衡の単位としてこれらの数が用いられていたためである）、またロシアの諺で7と言う数字が多用され、日本の諺で3と言う数字がひんぱんに用いられるのは共に宗教（ロシアではキリスト教、日本では仏教）の

影響であるということである。以上をもってこのささやかな調査の結論としたい。